

2021010

いまから半世紀も前に出た作品だが、石田雄『日本の政治文化——同調と競争』（東京大学出版会、1970年）という本を読んだ。

私は石田氏の膨大な著作のごく一部を読んだにとどまるが、いくつかの代表作は読んだし、個人的にも、東京大学社会科学研究所で助手をつとめていた時期に石田氏が所長だった頃に始めて、長きにわたりそれなりに付き合わせていただき、一定の影響を受けてきた。今回読んだ本のことも昔から知っていたのだが、何となく「読まなくても大体は分かる」という不遜な先入観をいただき、読まないままに放置していた。ふとしたきっかけで、遅ればせに本書のことを思い出して、古書を購入して読んでみたが、その印象は複合的である。一方からいえば、やはり何とんでも「古い」という印象は拭いがたい。半世紀前と今日とでは、対象としての日本社会は見違えるほど変わったし、社会科学の方法の洗練度はここ数十年の間に大幅に上昇したから、本書における分析の仕方にはややプリミティブに見える面がある。そして、結論的な主張はかなりの程度常識的で、驚くに値しないようにも見える。こうした点に重きをおくなら、「こんな古い作品を今頃になって改めて読む必要はない」という感想が正当化されるかもしれない。

しかし、それでいながら、本書の分析はいま読んでも結構当たっているように見えるところがある。内容は「常識的」かもしれないが、「忘れられつつある常識」であって、それを改めて思い起こすことは無駄でないような気もする。何よりも、この間盛んに言われている「日本社会における同調圧力の強さ」という問題について、半世紀も前に社会科学的に論じた先駆的作品があることをどう考えるべきか、これを長いこと忘れてきた側に何らかの問題があったのではないかといった感想もいだかされる。ということは、本書には「古い」面と「意外に現代的」な面とがあるということになりそうだが、その両面をどのように総合的に考えたらよいのかというのは、興味深い課題だろう。

話は変わるが、先頃亡くなった坂野潤治氏と石田氏は、同じ東大社刊に勤める同僚だった（年齢でいうと、石田氏の方が一世代上の先輩）。二人は長いこと各種共同研究で協力関係にあったが、ある時期から微妙に距離が開き、相互に批判的になった。おそらく坂野氏から見ると石田氏の作風は「古い」と見えたのだろうし、石田氏から見ると、ある時期以降の坂野氏の議論には危うい面があると見えたのだろう。私自身は両氏からそれぞれに影響を受けてきたので、そうした微妙な関係をどう考えるべきかというのも大きな課題である。

20210224

ソロモン・ヴォルコフ『20世紀ロシア文化全史』（沼野充義解説、出書房新社、2019年）という本を読んだ。

著者ヴォルコフはかつて『シオスタコーヴィチの証言』（原著は1979年、水野忠夫による邦訳はいくつかの版がある）でセンセーションを呼び、新しいところでは『シオスタコーヴィチとスターリン』（慶応義塾大学出版会、2018年）で知られている。私は以前からヴォルコフとシオスタコーヴィチの関係に関心を持ち、フェイスブック上でも何度か触れてきたし、それらをまとめた文章をホームページ上に掲げたこともある。

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~shiokawa/notes2013-/shostakovich.pdf>

ヴォルコフの名を最初に高からしめた『ショスタコーヴィチの証言』は、作曲家本人の口述筆記による回想（ヴォルコフは著者ではなく編者ということになっている）という体裁に即していえば偽書だといわざるを得ないが、体裁を離れた内容についていうなら、自らソ連で生まれ育ち、ショスタコーヴィチを含む多くの文化人・知識人と密接な関わりを持ってきた人による記述として興味深いものを持っている。ソ連を出国してアメリカに移住したヴォルコフがそういう体裁の書物で欧米世界にデビューしたのは、アメリカの環境の中でやむなく選択したマーケティング戦略だったのかもしれないが、不幸なことだったような気がする。それはともかく、より新しい『ショスタコーヴィチとスターリン』にせよ、今回読んだ本書にせよ、『証言』のようなセンセーショナルリズムからは免れており、わりと安心して読むことができる。『ショスタコーヴィチとスターリン』が表題に示される主題にフォーカスしているのに対し、本書は、より広く 20 世紀文化史——ここでいう「文化」とは、いわゆるハイ・カルチャー、つまり文学、音楽、バレエ、演劇、映画などの諸分野を指す——を総合的に描いている（著者が元来音楽の分野から出発しただけに、音楽にわりと重点が置かれているのが一つの特徴）。

この種の主題について考える場合、政治と文化の関わりが大きな比重を占めざるを得ないのは自然だが、その関係をストレートなものとして捉えると皮相な議論になってしまう（日本の音楽評論家の間で、いまだにそうした皮相な見方が横行しているのは残念だ）。本書の場合、多くの優れた文化人が迫害されたり弾圧されたりしたことに関する記述が多いのはもちろんだが、文化人と政治家の馴れ合いとか共犯などといった、いわばねじれた関係も各所で指摘されている。最大の「悪役」であるスターリンについて、高等教育を受けていないにもかかわらず熱心な勉強家かつ読書家で、多岐にわたる学問や文化を吸収したとか、各種芸術を本当に愛していたという、いささか意表を突く指摘もある。外国経験がほとんどないにもかかわらず、ゴリキーらに教えられて西欧文化人のことをよく知るようになったともされる（当然ながら、それだけで片付かないことも指摘されている）。「社会主義リアリズム」という言葉は中身が不確定であり、社会主義時代と現代とでは価値評価が逆であるにせよ、無内容なレッテルとして機能しているという指摘も興味深い。

本書にはトルストイやストラヴィンスキーをはじめ有名な文化人が多数登場し、彼らの間の複雑な相互関係——相互尊敬、ライヴアル関係、恩顧庇護関係、やっかみ、その他その他——を知ることができるのも興味深い（個人的には、プロコフィエフが大テロルの最盛期に欧米からソ連に帰国したのは、作曲家としてはストラヴィンスキーにかなわないし、ピアニストとしてはラフマニノフにかなわないと感じたからだという話が面白かった）。ノーベル文学賞をめぐる思惑や駆け引きについても、かなり詳しく内幕が描かれている。盛り沢山のエピソードの全てがありのままとは限らないし、やや雑然としている印象もなくはないが、トルストイの死去（1910 年）からソ連解体後の現代ロシアにまで至る 100 年間のロシア文化の社会史を多面的かつ詳細に描いた本として興味深い作品である。

20210228

私とフェイスブック上でつながっている人たちは、かなり色とりどりである。どちらかと

いえばリベラルな感じの人が多いが、中道右派とか穏健保守といった感じの人もおり、また政治的な発言をほとんどしない人も少なくない。そういう中でふと気づいたのは、コロナ禍問題にかかわる見解と日頃の政治的主張の間にあまり明快な対応関係がないということである。たとえば、日頃政府に批判的な人たちのうちの一部が「コロナはものすごく深刻な問題であるのに、これに無策である政府はけしからん」と主張するのに対し、別の一部は「コロナはただの風邪であり、それを政府筋が誇張しているのだ」と説いたりしている。それとは別に、「何が何でも PCR 検査を拡大すべきだ」という主張と「検査件数をむやみと増やすだけが能ではない」という主張の間での論争が長く続いているが、これは日頃の政治的見解をめぐる対立と対応関係にはなく、「リベラル」の中にも「保守派」の中にも双方の立場の人がいる。そして、最近ではワクチンをめぐって、「とにかく何が何でも早くワクチンを接種すべきだ」という主張と、「ワクチンにはまだ明らかになっていない深刻な副反応があり得るので、焦って接種を拡大すべきでない」という主張が——これまた、日頃の政治的見解にかかわる対抗と無関係に——相争っている。論点によっては、一部の「左翼」と一部の「右派」が奇妙な事実上の同盟を結ぶかに見えることもある。

上に書いたのは、問題の所在を鮮明にするための誇張と単純化を含んでおり、実際にはもっと多様でニュアンスに富んだ様々な議論が提出されているが、とにかく、「保守かリベラルか」とか「自民党政府支持か反自民党か」という対抗軸とはあまり明快な対応関係がない軸で種々の論争が展開されていることは確かだろう。これはある意味では自然なことである。コロナ禍が従来になかった新しい問題を突きつけている以上、それへの対応もこれまでの議論とは異なる次元で探るほかない。どのような立場も単純に従来の延長上で明快な結論を出すことはできず、新しい模索を必須としている。それがどこに導いていくかはまだ見通せないが、社会学者や歴史家にとって新しい時代が訪れようとしているのかもしれない。

20210304

梶谷懐・高口康太『幸福な監視国家・中国』（NHK 出版新書、2019 年）という本を読んだ。今から数十年前までは、「中ソ比較」というのはわりと多くの人の関心と呼ぶテーマだった。一人の人が両方を本格的に論じるのは難しいにしても、ソ連専門家が中国のことにも関心をいだき、中国専門家がソ連のことにも関心を持つというのはごくありふれたことだった。中ソ対立の時代には、その対立をどう理解するかが主要な関心の対象だったが、1980 年代になると、双方における「社会主義改革」の比較が主な論点となった。そのような比較の試みの例として、近藤邦康・和田春樹編『ペレストロイカと改革・開放——中ソ比較分析』（東京大学出版会、1993 年）という本があり、私も寄稿した。もっとも、この本はソ連でまだペレストロイカが進行している時期に進められていた共同研究の産物だが、書物ができあがる前にペレストロイカが挫折に終わってソ連が解体してしまったため、やや間の抜けたタイミングでの刊行となってしまった。それ以来、中国とロシア・旧ソ連諸国はそれぞれに異なる道を歩み、両者を比較しようという意欲もあまり起きない状況が続くこととなった。おそらく、中国ではソ連の解体を「反面教師」と捉え、「我が国はあのような道はとらないでよかった」という確信が深まったのではないかという気がする。

私自身に即していえば、上記の共同研究に参加していた頃まではそれなりに中国のことに目を配ろうとしていたのだが、その後は、「中国のことはよく分からない」と言うほかないという感覚が強まった。強いていえば、鄧小平以降の中国は共産党の統治する資本主義国になったのだろう——その前提として、資本主義経済はどのような政治体制とも結びつきうるので、共産党支配と結びついてもおかしくない——というイメージをいだいていた。このイメージは今でも全面的に否定するには及ばないという気がするが、21世紀に入ってから中国の新しい動向はそれだけでは片付かない面を含んでいるように思われ、どう考えるべきかということが気になってきた。習近平体制をどう捉えるべきかという問題は私の云々できる範囲を超えているが、とにかく「共産党支配」というだけでは済まず、何かそれだけには尽くせないものを含んでいるように見える。また、経済については、旧来の指令経済に戻ってはいないという意味では市場経済の一種だが、それだけではない、新種の資本主義になっているのではないかという気がする（いわば新しい次元の資本主義と新しい次元での共産党支配の結合）。

そういうことを漠然と考えるようになる中で、先ず矢吹晋『〈中国の時代〉の越え方』（白水社、2020年）を読み（この本については、2020年8月27日に簡単な感想を書いた）。それに続いて、このほど梶谷・高口共著を読んでみた。二冊の本の間には共通する点とそうでない点とがあるが、それをどう腑分けするかという厄介な問題はさておくとして、とにかく強く印象づけられるのは、デジタル経済化、AI技術、ビッグデータ、モバイル決済普及などといった動きが——それ自体としては他の諸国でも進みつつあるものとはいえ——現代中国では特に速いテンポで進んでいるという点である。このような傾向があまり抵抗なしにどんどん進む要因として、人々が各種便益享受と引き換えに自分の個人情報を提供することにそれほど強い抵抗感がないという事情があるようだ。大量の個人情報が国家なりGAF Aのような企業なりに集中されることは「監視社会（国家）」状態を生み出す。だが、目に見える強権ではなく、便益供与による誘導（一種のナッジ）を介したものであるため、多くの人々は「支配されている」という感覚よりも「幸福」を感じるということのようだ（なお、「ナッジ」については、2020年7月28日に素人流の感想を書いたことがある）。こうした趨勢は中国で特に急速に進んでいるとはいえ、欧米諸国や日本を含む多くの資本主義諸国でも進みつつあることを思えば、もはや資本主義 vs 社会主義という対置はさしたる意味を帯びず、問題は「幸福な監視社会（国家）」をどう捉え、そこへの道をどのようにたどるかという点にあるのかもしれない。

突飛な連想かもしれないが、日本の場合、もし安倍政権と菅政権の間に違いがあるとするなら、安倍政権期に日本会議系の人たちによって鼓吹された社会像が復古調のものだったのに対し、菅政権が目指しているのは「幸福な監視社会」への前進（？）ではないかという気がする。デジタル庁創設、縦割り行政の排除、マイナンバーカード普及等々の政策は、本書で紹介されている中国の状況を追おうとするもののように見えてしまうのだが、これは僻目だろうか。

20210325

一ヶ月ほど前、都築勉『おのがデモンに聞け——小野塚・吉野・南原・丸山・京極の政治

学』(吉田書店、2021年)という本を読んだ。

私は日頃、「非政治学的な政治学者」を自認しており、オーソドックスな政治学の本(もっとも、実を言えば、何が「オーソドックスな政治学」なのかということ自体が多義的であり、論争的なのだが)を読むときには、常にそれと自分の関係を測りながら読むことになる。本書は政治学の中のサブディシプリンでいうと政治学史あるいは政治思想史(このどちらの表現をとるかも、やかましい議論の対象となっている)に属する。その分野の専門家たちによってどのように評価されるのかは分からないが、とりあえず私にとっては学ぶところが多く、面白く読めた。もっとも、その面白さの内実を突き詰めて考えようとすると、難しいことになる。一つの特殊事情として、本書で取り上げられている政治学者たちは、私にとっては、彼らに育てられたわけではないのに「先祖」ということになっているという奇妙な関係が絡んでいるからだろう。

「おのがデモンに聞け」というタイトルは、京極純一が南原繁から聞いた言葉——「政治学に先生はない……では、先生なしで、どうすればよいか。おのがデモンに聞け」——に由来する。これは味わい深い言葉だが、「おのがデモンに聞く」とはどういうことなのかと考え出すと、様々な疑問が湧いてくる。これは政治学に固有な事情なのか、それともおよそ学問というものは一般に——いくら先学から多くを吸収するにしても、窮極的には——おのがデモンに聞くしかないのではないかという問題が一つ。また、本書では、明治以来西洋諸国からの輸入学問として成立した学問が時代とともに自前の学説を生み出すに至った経過が詳述されているが、ある程度そうした経験を経た後も、必ずしも全ての学者が「おのがデモンに聞く」形でその学問を営んでいるわけではなく、それができるのは少数者にとどまるのではないかという気もする。私の場合、もともと政治学者になるつもりはなく、その分野での徒弟修行を経ることなしに、いつのまにか政治学者ということになってしまったが、それは様々な偶然的事情の積み重ねの結果であって、「おのがデモンに聞いた」のだと誇れるという気はしない。